
語り部アリス

13番目のアリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

語り部アリス

【Nコード】

N0107K

【作者名】

13番目のアリス

【あらすじ】

「いらっしやいませ。ようこそ、アリスの世界へ」
迷いの森の奥深くにある木。そこにかけられた鏡の向こうの世界。そこにいるのは、不気味な物語を語り継ぐ、アリスと呼ばれる少女。少年に案内され、あなたはアリスのもとへと今日も足を運びます。ほら、あなたも虜になってしまおうでしょうか？

短編集です。

いらっしゃいませ

あれ？どうしたの？こんな夜遅くに。君は誰？あ、名前はいわないで。ここではそういうルールなんだ。

どこへ行くの？もしかして道に迷っちゃったの？「迷いの森」は、フクザツだからね。

それなら、一緒にアリスのところに行かない？僕、アリスのお話を聞きにいくところなんだ。

え、アリスって誰かって？女の子だよ。13か4か5か・・・あれ？いくつだっけ？とりあえず彼女はまだ子供のはずだよ。一人で不思議な世界を守ってるんだ。アリスの世界を一人でね。

あれ？もしかして、アリスの世界も知らないの？彼女に聞けば良いよ。

ほら、あそこの木にかかっている大きな鏡。あれが彼女の家の入り口さ。

ほら、入ってごらん。大丈夫。僕の手を握ってれば、絶対離れ離れにはならないから。

ねえ、目を開けてよ。ほら、もうアリスの家だよ。

じゃあ、僕は帰らなきゃ。アリスに見つかってしまっ前に・・・
。。え？うっん。こっちの話だよ。ま、君なら大丈夫。アリスも気に入るだろうから。

あのちいさくて小綺麗な家がアリスのうちさ。

さ、いってらっしゃい。

鏡

ようこそ、はじめまして。私がアリスです。お話のアリスと違うなんて言わないで頂戴ね。黒髪でも、私はアリスですよ。ここは、不思議な世界の入口。あ、あまり遠くには行かないでくださいよ？遠くに行きすぎると、不思議な世界に取り込まれてしまいますからね。元の世界に帰れないのは困るでしょう？

私は、ここに来た人達に14のこの世界の物語を語り継いでいるのです。

え？なぜかって？それは…14個目のお話のときにお教えしましょう。

さてと…今日は何の話をしましょうか…。

箱庭ノ王女

いらつしやいませ。

え？私が持つている人形？

ああ、これですか？素敵でしょうか？ある王女さまの遺品だそうで、知り合いから頂いたんですよ。

そうそう、今日はこの人形にまつわる、かつてこの世界の中心にあった国の狂気に取り憑かれた王女さまのお話をしましょう。

王女の名前はアリカ。それはかわいらしい女の子だったそうで、母のような真つ赤なツインテールを黒いリボンを結んで、黒いドレスを着たその姿は、正に由緒正しい王女そのもの。ただ、幼い彼女には困った性格がありました。

「ねえ、人はどうやったら死ぬの？」

アリカさまはずっと、お母様である女王様に問い続けていたそうです。

ある日、女王がアリカさまのお部屋へ行くと、彼女は、いました。

手に、十字架に張り付けられた人形を持って。

「ねえ、お母様」

彼女は無邪気に話します。

人形のドレスは引き裂かれ、髪はむしつたようにボロボロです。頭には茨で編まれた冠、細い手足は釘によって十字架に打ち付けられています。

アリカさまの手には、金槌がありました。

女王様はただただ恐ろしくて、呆然とその光景を見つめています。

「この娘はね悪い王女さまなの。でもね、好き勝手したからね、殺されちゃったの。でもね…」

「やめなさい、アリカ！」

「でもね、この娘、死なないの」

女王様は無邪気に語る王女が信じられませんでした。

「お人形はね、死なないのよ。ずっと…」

女王様はそつとアリカさまを抱き締めました。

「ねえ、お母様」

それから数日。

「人間は？」

メイドの女性が一人、刃物で心臓を刺されて死にました。

真っ赤なものが床を染めます。息はもうありません。

アリカさまはそれを、不満げに見つめます。

「赤いものは流しているけど、本当に死んでいるのかしら？」

女王様は目を見張りました。

アリカさまは刺さっていたナイフを抜き取りました。

「心臓：止まってる。」

「いやあああああああ！」

女王様の叫び声が響きました。

しかし、それは、幼いが故の狂気の始まりでしかなかったのです。

それから数年。かわいらしい女の子だった王女さまは、美しい王女へとなりました。幼かった彼女も15歳です。

しかし、王女が大きくなるにつれ、城内から出る死人は増えてゆきました。

彼女の狂気は、大きくなっていたのです。

彼女は、死人の捨て場を、罪人を捨てる塔の中と同じだと思い、死人をこっさりそこに入れ、何もなかったふりをしていたのでした。そして、ついに、女王をも殺してしまったのでした。

城に殺せるものはもう居ません。アリカさまは街へ行きました。

王女が来たとなつては、街も大騒ぎです。

しかし、街の人々の歓迎もそこに、彼女は、人々を殺しました。殺した人々は、みな塔に入れます。

アリカさまは街を彷徨いました。もう殺す人は居ません。寂しくなったアリカさまは、塔に行きました。

塔には、死体の山ができて居ました。

そつと側に座り込みます。

幾日も、幾日も、幾月も…。

「どうしてみんなお人形になっちゃうの？」

彼女は、まだ皆が生きていると思っていたそうです。否、死んでいく事を理解できないのです。

そのうち、暇を持て余したアリカさまは、死体で人形遊びを始めました。

塔は、彼女の箱庭でした。

「あれ…？」

ある日、アリカさまは異変に気がつきました。

「動かない…」

手足が動かないのです。

無理ありません。何日も食べていないのですから、体が衰弱していたのです。

「私もお人形……」

そこまで言くと、王女さまは、自らの箱庭で倒れて、動かなくなっ
たそうです。

いかがでした？

お帰りはどうぞお気をつけて。

あと、くれぐれも不思議な世界の中心にある塔には近付かないで。
もしかしたら、まだ王女が生きていて、殺す人を探しているかもし
れませんかからね。

では、さようなら。

毒入りティーパーティー

あら、いらっしやいませ。

ちよつど紅茶をいれていたところなんですよ。良かったらお話と一緒にいかが？

あ、角砂糖とミルクはあまり入れない方がいいですよ。毒が混じっているかも知れませんかからね。

うふふ。冗談ですよ。

そうそう。こんな話聞いた事あります？

ここからかなり北に進んだところに昔、立派な貴族のお屋敷が2軒立ち並んでいたそうなのですが、すぐく仲の悪い両家だね。

その家の娘と息子が幼馴染で恋人同士だったのですつて。毎日、両家の境目の庭で2人きりのお茶会を開いていたそうですよ。

元々両家は仲が良かったのですが、ちよつとした事で仲違いしてしまつてね。

それから2人はロミオとジュリエットのように逢う事すらできなくなり、お茶会なんて以ての外でした。

ある夜、娘は、こつそりティーカップと紅茶の入ったポット、ミルクを持って、庭に出ました。それを見た息子は、ケーキやクッキー、そして角砂糖を持って庭に出ました。

それから彼らは毎晩2人きりのティーパーティーを開くようになってしまつた。

しかし、まもなくそれも両親に見つかり、2人はまた引き裂かれま

した。
ある真夜中、息子と娘は、そつとベッドを抜け出し、最後のティーパーティーを開きました。息子の角砂糖には毒が、娘のミルクにも毒が混ざっていました。

2人とも、両家の間でもうすぐ戦争が起こり、それぞれの両親がお

互いの娘と息子を人質にしようとしている事を知っていたのです。そして、どうせ死ぬなら2人で。そう思い、それぞれ、砂糖に、ミルクに、毒を仕込んだのです。お互い、相手が毒をいれている事を知りません。

息子のカップにも、娘のカップにも、毒入りの角砂糖とミルクが入っています。

ケーキを一口食べて、お茶を口にした瞬間。彼らは、同時に地面に倒れ、動かなくなりました。

翌朝、彼らが倒れていた場所に墓がたてられ、2人が並んで眠りました。

いかがでした？

話していたらすっかりお茶が冷めてしまいましたね。あら、もうお帰りですか？

良かったら帰る前に行ってみてはいかがですか？貴族のお屋敷へ。噂では、真夜中になると、紅茶を入れる音や、ケーキを食べる音、2人の男女の笑い声が今も聞こえて来るそうですよ。

それでは、お気をつけて。

何もない博物館

いらっしやいませ。またいらっしやるなんて、物好きな方ですね。こんな私の話なんか聞いても面白くないでしょうに。

…さて、と。今日は何もない博物館に一人佇み続けた少年の話をしてみましょう。

消えたい

少年は、いつもそう思っていたそうです。彼は、空っぽの博物館の幼い館長。

その博物館には、彼の生き様が飾ってあったのでした。

彼は、ひどく臆病な性格をしていました。

こんな所に佇み続けるなら死にたい。そう思っても、痛みが怖くて死ぬ事なんて、とてもできなかったそうです。しかし、彼には、生きる強さもありませんでした。

死ねるほどに恐いもの知らずなんかじゃない。

生きる強さも無い。

消えたい。

そう願いながら、彼は、自分の生き様を飾るための額を眺めます。

立派な展示品なんて、彼は持ち合わせていない。

ただの臆病者。

泣く事も、何かに当たることもなく、ただただ、呆然と彼は一人佇み続けます。

そして、そっと呟きます。

「誰力僕ヲ消シテクダサイ」

乾いた唇から紡ぎだされたその言葉は、とても不気味なものだった
そうです。

いかがでした？

あ、もしあなたがその博物館に立ち寄ったときは少年を助けてあげ
てくださいね。

彼はきつと、まだ展示品を飾れずに佇んでいるでしょうから。
では、お気をつけて。

トランプの女王

いらっしやいませ。

今日は、お話しながらちよつとゲームをしてみませんか？

トランプ、できますでしょ？ハバ抜きでもやってみましょうよ。

さて、では、ゲームを楽しみつつ、お話、ですね。

トランプの女王を知ってますか？

不思議の世界の東西南北を治める桁外れに強い魔力を持った魔術師の少女たち　アリスになれなかった少女たちです。え？アリスは私だって？……ええ。確かに私はアリスですが……。このアリスはまた別もの……。いえ、何でもありませんわ。これはまた次の機会にお話しましょう。

さてと。

北にスペードの女王。

西にクラブの女王

東にダイヤの女王。

南にハートの女王。

彼女たちは、自分たちを女王と名乗りますが、彼女たちは、女王などとはほど遠い存在です。

ただの魔力が強過ぎたがために呪われた女の子たち。

少女たちは、自らアリスになることを望みました。しかし、アリスになれるのは14人。丁度、トランプの13《キング》とジョーカーを足した数です。

そして、彼女たちは、それに選ばれなかった。

行き場を失った女王たちは、東西南北を守り、不思議の世界に結界を張り、この世界を歪にゆがませたのです。

ここは、不思議の世界だなんて簡単な話じゃあないので……あら、私ったら。こんな話をしてしまっただなんて。お話の続きですね。

彼女たちはガラスの宮殿にたった一人で住んでいます。頭に冠やテイアラをつけ、豪華なドレスを着、玉座に座り、天を見上げてこう言います。

「私をアリスにしてください」

叶わない願いなのに、彼女たちは、いい続けるのです。

アリスになれば、結界をはって、膨大な魔力を消費しながら命を削り、死を怯えながら待つ事だっただけになります。

彼女たちは、死を恐れていました。

いいえ、天命を全うするなら、別に恐れる事なんてないでしょう。彼女たちは、自らの魔力に食いつぶされようとしているのです。

魔力を使う度、その身を死の恐怖に近付けるのです。彼女たちは、今日も呟いているのでしょうか。

「私をアリスにしてください」

と。

いかがでした？

……あら、嫌だ！ジョーカーじゃあないのでか！

ハア……トランプは私の負けですね。

え？女王は今も健在なのかって？ええ、もちろん。

こうしている間も、自らにかけられた呪いに怯えているでしょうね。

それでは、お気をつけて。

アリスになれなかった少女達

いらっしやいませ。

さあ、今日は……え？リクエストですか？

ええ、もちろんいいですよ。リクエストなんて初めてです。

それで、何のお話ですか？

……この間の女王のこと……ですか……。

……彼女たちの過去……。

あ！いえ、構わないんですよ？あなたが聞きたいと願うなら、私は構いませんわ。

それでは、お話ししましょう。

彼女たちは、女王になる前は、普通……と言っても異常でしたが、まだ普通の少女たちでした。

彼女たちは、それは素晴らしい魔術師でした。

歳の割に、特に後にクラブの女王となった少女は、強大な魔力を秘めていたのです。

しかし、その魔力は強すぎました。

それも、悪い方向に。

アリスの素質のあった彼女たちは、アリスになるべく集められました。

しかし、彼女たちの強い魔力を、アリスの魔力は拒んだのです。

結局、彼女達はアリスになれず、彼女達は、『アリスの失敗作』と
なってしまうました。

アリスになれなかった彼女たちは、彼女たちの魔力をも上回るアリスの魔力に殺されてしまうところでした。

しかし、現れたのです。14番目のアリスが

ジョーカーは、彼女たちを生きながらえさせるため、呪いをかけたのでした。

アリスの魔力ではなく、自分たちの魔力に食いつぶされるように

あら、私としたことが、随分話してしまいましたわ。

いえ、時間ではないのですが……。

あまり調子に乗りすぎると、ジョーカーが私を見つけてるでしょうかね……。

あ、ああ、いえ。何でもありませんよ。こちらの話です。

それでは、お気をつけて。

仮面の悪魔

いらっしやいませ。あら、またいらっしやいましたね。
さあ、今日は何のお話にいたしましょう。

そうですね…貴方は、この世の全てを手に入れた者を見たことありますか？

富も名声も才も…そして、罵声も。

ええ、いたんですよ。この世界には昔、そんな人が。

名を、ウィリアム・セレディー。

かつて、この世界の頂点に君臨し、全てを手に入れた若き王です。

彼は、小さな国の王子としてこの世に生を受けました。

幼い頃から学問は優秀な成績で、政治に関しても、その実力を遺憾なく発揮しました。また、剣術、武術の素晴らしい才能を持っていました。

先代の国王は、ウィリアムが15歳の時に亡くなられました。そして、必然的に、彼が国王の跡を継ぐことになったのです。

国民の誰もが、若さと才能に溢れた新たな国王に強い期待を抱いていました。

しかし、民のその期待は、裏切られたのです。

国王となったウィリアムは、辺りの国々を征服し始めました。

妖しい仮面をつけ、見事な指揮と自らの剣の腕で、どんどん周りを

征服していったのでした。

始めは、周りの小さな弱い国々だけでした。

しかし、国や兵が力をつけていくと、彼は、大きな国まで征服するようになったのです。

国は、一層力をつけ、ついには、世界の二分の一を、自分の領土としてしまつたのです。

国は産業などでも実績を上げ、彼の周りの貴族たちは、華やかな生活を始めました。しかし、ウィリアムは、全くと言っていいほど、王らしい華やかな生活をしませんでした。政治なども全て大臣たちに任せつきりになり、自分は、たびたび戦場へ出掛けました。

彼は、他の国を欲しがりました。

そして、自分の欲望のままに、周りの国々をまた征服していったのです。

仮面を付けた、異様に強い若き国王。

彼は、いつしか「仮面の悪魔」と呼ばれるようになりました。

同じ頃、ウィリアムの国の隣国にあたる国も力をつけていました。

二国はぶつかりあい、やがて、戦争が起きました。

しかし、ウィリアムの兵は、あっさりとやられていきます。数でも、強さでも、隣国のほうが勝っていたのです。

ついに、残るはウィリアムだけとなりました。

敵国の王が、ボロボロにやられ、地に膝をついたウィリアムの喉元に剣を突き付けて言います。

「仮面の悪魔よ、仮面をとれ」

ウィリアムは黙ったままです。

「とれッッ！」

王の怒号が響きます。

自分より明らかに経験も豊富で、年齢も上の王を相手に、ウィリアムは思わずピクリと動揺しました。

そして、大人しく仮面を外しました。

「…よもや、あの悪魔と恐れられし王が、これほど幼い子供だったとはな！」

王は、ウィリアムを嘲笑うかのように、高らかに叫びました。

「仮面の悪魔…いや、ウィリアム・セレディーよ。何か死ぬ前に言うことは？」

ウィリアムは、フツと笑うと、初めてそこで口を開きました。

「我の名は仮面の悪魔などではない。世界の頂点に君臨する王、ウィリアム・セレディーだ！」

敵国の王の剣が振り下ろされます。

殺される間際、ウィリアムは、王の威厳を示したのです。

いかがでした？

ああ、実は、この戦場でのお話は、私のちょっとした知り合いから教えて頂いたのですよ。

世界の全て、名声をも手に入れた国王と、戦場でただただ自らの欲を満たすため、剣を振り続けた悪魔…彼の仮面の下の顔はどちらでしょうね。

では、さようなら。

鐘がなる教会

いらつしゃいませ。

あら、丁度ですね。

え？何かあるかつて？

…耳を澄ましていれば分かりますよ。

…ほら…

聞こえました？鐘の音ですよ。

柔らかくて、温かい…いい音でしょう？

毎日丁度この時間に鳴るんです。

ここから見える、あの教会の鐘ですよ。…もう、寂れてしまって、誰もいないのですが。

そうだ。今日は、あの教会のお話をしましょう。

随分と昔のこと。

かつて、この世界が、混沌の闇に囚われていた時代。

突如、双子の魔術師が現れました。

鏡に映したように、瓜二つの顔。

長い金髪をもつ姉と、短い金髪をもつ弟。

姉弟は、優秀な魔術師でしたが、当時は、まだほんの9歳でした。

白いベレー帽のような大きな帽子に、同じく白い服に、白いマント。

何色にも染まりうる、何色をも無ゼロに帰す白。

姉弟は、混沌から世界を救おうとしました。

双子は、教会の鐘の音に乗せて、自らの魔力で、冷えきった人々の心を温めました。

しかし、二人は、まだ9歳です。

魔力を使いすぎれば、死んでしまいます。魔術師にとって、魔力は命そのもの。普通に使うのは平気ですが、一度に多量の魔力を消費することは、自ら死ぬことと同じ。

ある日姉が倒れました。

原因は、まごうことなく、魔力の膨大な消費。

弟は、死んだ姉を抱き抱え、なおも世界を救おうとしました。

ついに弟まで死んでしまいました。

しかし、不思議なことに、教会の鐘は、二人が死んでなおも、鳴り続けるのです。

まるで、二人の意志を継いだかのように…

いかがでした？

他人の幸せばかりを願う人間は、何時か自らを破滅させる…“善”ばかりを行う人間は、本当は何よりも愚かなものなのでしょうね。

姉も、弟も…

実は、彼等は、ホントは、この世界の住人ではないのですよ。きっと、魔法を使って、時空転送を行いでもしたんでしょうね…

でも、そこまでして、彼等がこの世界を救う利点って…いえ、何でもありません。

それでは、また…

檻と罪のゲーム

いらっしやいませ。

え？何をしているかって？

見てのとおり、『すぐろく』ですよ。

サイコロ一つで、ここまで変わる人生。まるで博打の連続ですね。今日は人生をゲームとすり変えてしまった罪人たちのお話をしましょうか。

『囚人』

彼等は、彼女たちは、そう呼ばれる生き物です。

人間なんて呼ばれるような代物ではない、“元”人間。

人生をゲームと捉え、スリルを求めて博打を楽しむ者。その思考は罪となり、プレイヤーはその罪を背負って囚人と成り果てるのです。ある者はつまらない人生に飽き飽きして。

ある者はちよつとした変化を求めて。

またある者は自らの運命を歪ませるために。

人生は楽しいゲーム。

サイコロ一つで廻るその世界。

ただし、囚人には、幸せな人生を歩むことは許されません。彼等には、彼女たちには、選択権などありません。

あるのは、運命を決めるたった一つのサイコロ。

誰もが悲惨な終わりを迎え、後悔の念に囚われるのです。

ああ、ゲームなんてしなければ良かった、と。

生きて、死んで、また生まれ変わって。

繰り返すは輪廻転生と逃れられない悲惨な運命。
どれだけ暴れようと、どれだけ泣き叫ぼうと、運命の檻からは逃れられない。

輪廻の記憶は、囚人たちに深く刻まれ、また生きる。それが、地獄からの脱出するゲームのルールなのです。

囚人から解放される方法はたった一つ。

幸せな最期を迎えること。

ただし、それは、自らのサイコロと運命に左右されるのです。

ああ、そうそう。もうひとつ、特別ルールがあるのを忘れていました。

“囚人”が死ぬ代わりに、他の“誰か”が死ぬこと。

その誰かは、囚人自身が殺そうが、誰か自身が命を絶とうが、どんな死に方でも構いません。

でも、ただひとつ、重要な条件があります。

それは、囚人が確実に後悔する死に方。

それも、生半可な後悔ではなく、囚人であったほうがよかったと思えるほどの、深い深い、もう後戻りのできない後悔。

まあ、そんなルールで囚人の運命から逃れられるのは、ごくごく一部の握りの存在だそうで、こんなルールなんて、あってもなくても同じなのですが。

ほら、また、何処かで誰かが呟いた。

ああ、ゲームなんてしなければ良かった、って。

いかがでした？

街で体の何かが足りない、虚ろな目をした人にあつたらご用心。囚人たちに感化されて、ゲームに参加してはいけませんよ。

：それにしても、そんなゲーム、一体誰が何のために作り上げたのでしょうかね。

人間たちを魅了する悪魔のゲーム。

絶対に参加してはいけませんよ。
では、また。

未完成の楽園

いらっしやいませ。

そういえば、今日もあの鏡を通ってこちらへ来られました？

…ああ、普通に來れたんですね、良かった…

いえ、大丈夫です。

最近、ちよつと嫌な噂を耳に致しまして…何でも、何処かで時空の理が壊れてきているとか…ああ、大丈夫、心配ありませんよ。

きつと、アリス達がなんとかするでしょうから…

さあ、それよりもお話ですね。

あるところに、魔術で栄えた国がありました。

その国は、平和で、国民は皆仲良く暮らして居ました。

しかし、ある時、時空を超えて、たった一つの『異端』な存在がその国に現れました。

彼等の平和は、ここから脅かされたのです。

『異端』は、特に何もしませんでした。

ただ、国民と仲良く暮らし、魔術に励み、国王を敬い、国や皆の為に働きました。

民が『異端』の存在に気付かなかったように、『異端』は、自分が『異端』であることに気付かなかったのでした。

『異端』は、ある時、とある魔術師と共に、小さな『楽園』を創り始めました。

柔らかな草原の中に、花が咲き、木が生える。
暖かな風が吹き空は何処までも晴れ渡り、虹が見える

そんな理想郷。

彼等は、そんな理想郷を夢見て、毎日少しずつ少しずつ、『楽園』を創りあげていったのでした。

ところが。

『楽園』が、完成することはありませんでした。

『異端』の存在が、ついに国中を歪め始めたのです。

『異端』は、本来その世界に居てはならない、居る筈のない存在。それが存在することにより、その世界の理が崩壊し始めたのです。

魔術師は、友人である『異端』を、無理矢理彼をもといた場所に戻りました。

そのお陰で、その世界は、なんとか崩壊を免れました。

しかし、魔術師は、『異端』をそばに置き続けたことにより、国から追放されることになってしまいました。

いくら知らなかったとはいえ、その世界を脅かす存在に気付かず、その世界の崩壊寸前まで追い込んだ存在を見過ごすことは、その魔術師の『落ち度』以外の何ものでもありません。

彼は、本当に沢山の魔力を持った、素晴らしい魔術師でした。

今も、生きて追われ続けているのでしょうか…？

そして何より、『異端』が何処に姿を隠してしまったのか…私は知

りません。

そもそも、彼等は本当に存在したのでしょうか？
別の魔術師による魔法ではないのでしょうか？

でも『異端』と魔術師が、確かに存在したという、たった一つの証
拠があります。

それは、崩れかかった、未完成の『楽園』。

世界が崩壊しかけた時に、一緒に滅びかけた『楽園』です。
…彼等が居なくなってから、時間が止まってしまい、魔術師や『
異端』が植えたという花が、未だに咲き続けて居るといふ噂ですが。

いかがでしたか？

その後、あの魔術師や『異端』がどうなってしまったのか…知る人
は未だ出てきません。

確かなことは、彼等は確実に存在したということ。

そして、あの未だ完成しない『楽園』の存在。

それだけなのです。

それでは、お気を付けて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107k/>

語り部アリス

2011年10月6日03時25分発行